



“誤った思い込み” について

毛塚 満男
東京都立駒込病院医長

長年心身症の患者さんとお付き合いしていて一番印象に残ることは、大多数の人が“誤った思い込み”をしていて、それに全く気づかずにいる事実です。

ある若い女性の患者さんは、結婚後主人の親と同居してから持病の喘息が悪化し、別居しましたが完全には良くなりませんので当科に来院しました。話をよく聞くと、今だに姑と実父が子育てにうるさく干渉してきて、無下にも断れず、板挟みになり、苛々を夫と子供に当ててしまい自己嫌悪に陥ってしまうということでした。

この患者さんの病理としては、分離不安・病的依存心・受け身の操作性・自己の主体性の無さなどがあることは明らかなのですが、もっと重要だと感じたのは“誤った思い込み”を有していたことでした。彼女は、「目上の者は敬うべきであり、決して楯突いてはいけなし、命じられたことは少々無理してでもやるべきであると信じてきた。これまでの人生では、この信念で誰からも信頼され愛されてきたのに、姑にはどうもうまくいかないんです」と悩みを語ってくれました。信じられないことですが、30歳を過ぎているのに彼女は「結婚しても誠意をもって尽くせば、姑にも実母と同じように愛してもらえるに違いない」と姑にも一体感を期待していたのです。

筆者が、「姑にとっては、貴方は最愛の息子を盗みとった泥棒猫であり、憎くて仕方がないし、離婚させたいぐらいの気持ちもあるのが普通なんですよ。貴方の中にも、姑なんか邪魔で仕方がなく、早く死んでほしい気持ちもあるでしょう？」と説明すると、患者は「ああ、そうなんだ！ でもそういうことは、絶対考えちゃいけないと思ってました」と驚いた様子でした。

精神分析的に考えると、彼女は無意識的に母親の考え方や生き方を理想化していたと思われます。それは、「他人に迷惑をかけてはいけない」「人を差別してはいけない」「人を傷つけてはいけない」「誠意をもって話せば分かる」「人を悪く見えてはいけない」「争いごとをしてはいけない」「自分と同じように他人もつらい

のだから労ってあげなくてはいけない」などであります。

つまり、患者は無意識にすべての他者と信じ合い、分かち合い、愛し合いたいと強く望んでいたのです。そのため、彼女の一体化願望を逆撫でするような人物に出会うと、そのたびごとに傷つき、喘息などの身体化で辛うじて防衛してきたと思われま。

母親との間で経験した“絶対的な安心感”や“ユートピア的一体感”が、絶対の善であり、永久に続くものだとして疑ったことがなかったのです。結婚するまでは、そのほうが都合が良かったのでしょう。そのため他人が何を考え、何を望んでいるかが、分かっているつもりでも、ほとんどの外れであったことに気づいてなかったのです。無意識の願望が、これに気づくのを邪魔していたのです。

しかし彼女は神経症レベルの患者さんであったので、この“誤った思い込み”は軽症であり、治療者の指摘で錯覚に気づいて健康を取り戻されましたが、拒食症や過食症の場合でははるかに重症になり、いろいろな解釈をさまざまに工夫して与えても頑固にこれにしがみつき続けるのが普通です。

では、重症の“誤った思い込み”を有する患者には、どのように対処したらよいのでしょうか？ この場合、筆者は全く逆に、この“誤った思い込み”に対して共感し支持し補強することに専念いたします。

何故ならば、重症の摂食障害の患者のほとんどが、忌まわしい現実を排除し否認するために、また母親との幻想的一体感に浸りきるために、痩せることに必死になっているからです。つまり彼女の自我は、もう崩壊寸前の状態です。ですから徒に“誤った思い込み”として直面化をしてみれば、心の交流は成り立たず、患者はますます厚い殻の中に奥深く入り込んでしまうに違いありません。

このような事態を防ぐには、誤っているのが分かっているにもかかわらず患者の身になって、「そうだよね、本当に君の言うように、みんな仲良くできるといいのにね。でも君がみんなの幸せを願って一生懸命努力していることは、きっと何時かは分かってもらえると思うよ。だから元気を出して頑張ろうね」と強く保証しなければなりません。

不思議なことに、徹底して彼女の“誤った思い込みの世界”を支持していくと、やがて彼女の方から、自分を支配してきた母への恨みや、母に去勢された情けない父への怒りや、「自分は何の取柄もない人間だ」などという深刻な悩みを吐露し始め、治療が急展開していくのをしばしば経験致します。